adagio

神崎みこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ａｄａｇｉｏ

【Ｎコード】
Ｎ８１６３Ｘ

【作者名】
神崎みこ

【あらすじ】
人と上手く接することのできない秋音は、同じくあまり人に興味のない教師古瀬と出会う。戸惑いを覚えながら二人の距離はゆっくりと、ゆっくりと近づいていく。（ｃａｐｒｉｃｃｉｏさまからお題をお借りしました）

四月・はじめて

春は少しだけ苦手だ。
人とのやりとりが得意じゃないわたしにとって、クラス替えも、環境の変化も、それらを含む全てに対してハードルが高い。正直、逃げてしまえば楽なのにな、と思わないこともない。
だけど、そんなことは口にも出さず、わたしはいつものようにへらりと笑って、友達とおしゃべりをする。
少し甲高い声がわたしの周りを飛びかい、新しい担任の登場によりそれは中断された。
ほっとして、わたしは決められた席に座りなおす。
基本的には代わり映えしない生活。退屈で、だけど時間は確実に過ぎてくれることを知っている。好きなことも嫌なことも、何度も息をして眠ってしまえば過去のことになるから。
担任は普通の中年のおじさんで、あからさまにがっかりした雰囲気が女の子たちから漏れていることを気にもしていない。簡単に説明をして、わたしたちはまた新学期第一日という少し特殊な日から日常へとスライドしていく。
二年生というゆるやかな空気の中、授業が終わった後はぼんやりと図書館で過ごす。それは一年生の頃からのことで、最初は妙に見られていたわたしの行動も、そのうちそういうものだと認識されていった。
バイト以外はここで過ごすわたしは、いつも座る席に腰掛け、ゆっくりと厚い表紙をなでる。
古ぼけてやや痛んだその本は、有名なファンタジーのひとつであり、正直わたしには少し難しかった。
でも、その世界観が好きで、わたしは何度でもそれを手に取った。
背表紙を開き、ページをめくる。
周囲の音が徐々に小さくなっていき、わたしは本の中へと没頭して

いく。
どれぐらい時間がたったかわからなくなったころ、カタンという小さな音でわたしは本の世界から引き離された。おそらく集中力が弱くなってきたのだろう。目をこすり、軽く肩を回して丁寧に本を閉じる。

「ごめん」

聞き覚えのない声がおりてきて、わたしはそちらへと視線を向ける。身に覚えのない謝罪を受け、わたしはその人物をきっと思った以上に不審な目で見ていたのだろう。すっかり恐縮しきった人物がこちらをまっすぐに見つめていた。

「音、たてちゃって」

男の人は、事態を把握していないわたしを尻目に、淡々と説明を続ける。
おそらく、わたしが集中を切れさせるきっかけをつくったであろうあの物音を立てた人だろうと、ようやく検討をつけた。ゆるゆると頭を左右に振って、気にしていないと態度で示す。外はいつのまにか暗くなっており、あわてて時計を見ればここの閉館時間が迫っている。
いくらここにいたいと願ったとしても、所詮高校の施設を二十四時間開放してくれるわけではない。
のろのろと立ち上がり、今まで読んでいた本を手に取る。

「もう帰らないといけないですから」

ぎこちなく笑う。

「珍しいね」

それは、わたしがここにいることだろうか。それともここに高校生がいることだろうかと考え、おそらくわたしのことを知らないこの人は、後者を知りたいのだろうと推し量る。

「結構いますよ、常連さん。今日はたまたまわたし一人ですけど」

こんな辛気臭いところに、とクラスメートは言うけれど、意外とここには人がいる。そのほとんどが固定されたメンバーだから、数少ない変わり者の巣窟ともいえるのかもしれないけれど。

何かの資料なのか幾冊もの本を机の上に置き、さらには数冊の本を右手に持った人は、困ったような笑顔を作る。

話しかけたまではいいが、それ以上の会話を続けられないのだろう。先生にしては珍しいタイプだと観察をする。

記憶の奥底からひっぱりだし、この人が同じ学年のどこかのクラスの副担任だということを思い出す。

若ければ格好よくても悪くても人気のある商売において、この人の周囲は比較的静かだったこともついでに。たぶん、それはこの人の持った雰囲気のせいなのだろう。

熱血でもなく、だからといって冷め切ってもいない彼はいたって普通の人間だ。だけどその授業があまりにも単調で、ただこなせばいいだろう、という彼の態度に人気が集まりにくいのだと誰かが言っていた。

彼は教師という職業があまり好きではないのかもしれない。

「手伝いましょうか？」

確実に両手に余るその本たちに手を伸ばしたら、彼の左手に少しだけ触れた。

その瞬間、彼はものすごい勢いで手を引き、そして困ったように笑った。
その笑顔は仮面のようで、そして確実にわたしを拒絶していた。

「先生さようなら」

わたしはおもしろいものをみたような気分で彼に挨拶をし、そして図書館をあとにした。
人間嫌いの教師。
その矛盾した言葉に、彼に少しだけ興味を覚えた。

古瀬学という名前だと、あの先生のことがわかったころには、時間は随分とたってしまっていた。
積極的に探しだすつもりも、知るつもりもない。
だけど、耳に入った名前は、わたしの記憶にしっかりと残ってしまった。
人の名前など覚えることが苦手だというのに、よくわからなくていつのまにかへらりと笑っていた。

「気持ち悪いなぁ」
「ごめん、ちょっと」

それ以上は聞いてはこない彼は、わたしの額を軽く指先ではじく。
痛みに額を押さえ、涙目で彼を見上げる。
幼馴染で保護者のようでもある高井亮太の家に、わたしはこうして入り浸っている。
彼の父親は、仕事人間であり、あまりこの家にはたどり着けないでいる。
わたしの家は、両親そろってそれぞれの恋人のところにでもいるのだろう。

もう顔もおぼろげな彼らを思い出し、乱暴に大根を切る。

「泊まってく？」
「うん」

いつもの会話を交わす。
コンロの上には味噌汁にする予定の出汁が入った鍋と、まだ何も入れられていないフライパンが一つのっている。
これから簡単な料理をして、亮太と一緒に夕食をとる。
わたしにとってはありふれた日常。
だけどふいに浮かんできた男の顔に、わたしは戸惑いを覚えた。

五月・手を繋ぐ

学生のころに読んだ本を読み返してみたくて、唐突に図書室というものに行ってみた。
将来のことなど何も考えず、ただなんとなく読まされていた本も、今なら別の感想をもつかもしれない。
そんな自分らしくもない思いつきにとらわれたのは、久しぶりにきたメールに影響されたせいだ。
他愛もない内容のそれに、どれだけ振り回されているのかも知らずに、それでも拒否もできないでいる。
かすかなそれでもつながっていたいのだと、思い知らされる。
こんなに未練がましい自分は、大嫌いだというのに。

少しかび臭い部屋に入る。静寂と懐古、という雰囲気が押し寄せ、そんな経験はないのに懐かしさすら覚える
図書係がいるはずの場所には、誰も存在せず、そして図書室には一人の生徒がおとなしく座っていた。
運動部で適当にすごしていた自分は、学生時代にあんな風に熱心に本を読んだ記憶はない。ただ受験のためになる、だとか、忌まわしい読書感想文のための本探しでぶらぶらした程度だ。
覚えていたタイトルの本を、片端から集め机の上に積んでいく。それだけでなにがしかの高揚感が得られ、こういうのも悪くはないという気分にさせてくれた。
読みきれるはずもない本が積まれた机の反対側には、一人の女生徒が座っていた。見覚えのないその子、といっても僕は人の顔をおぼえるのが苦手なのだけど、は同じ格好でずっと本を読み続けていた。
動いているのはページをめくる手だけ。
文学少女、というベタなイメージからは程遠い彼女に見入ってしまったのか、教師である自分が騒音の元を作ってしまった。

それに気がついたのか、彼女は本から目を離し、ゆっくりとこちらを向いた。
少し茶色がかった瞳がこちらをまっすぐに射抜いたような気がして、わけもなく目を逸らしたくなった。
手伝おうとした彼女が自分の手に触れ、瞬時にして大げさにその手を引き上げた。
彼女は驚くでもなく、悲しむでもなく、ただ淡々とこちらを見据え、そして笑った。手を繋ぐわけでもないのに、いやそれにしたところでこんな大げさな反応は成人男性がやっていいものじゃない。
彼女の白い手に、何かを思い出しそうになった。
言い訳するのもおかしくて、何も言えないでいる自分に、彼女はにこやかな顔を向けた。
そしてさようなら、といいながら何事もなかったかのように隣を歩き去っていった彼女の残したかすかな香りに、体のどこかが痛んだ。

授業は、教師という仕事のうちの一つにすぎない。
教えやすく、だとか、興味を持ってもらおう、だとかそういう気持ちを抱いたことはない。
与えられたノルマを、与えられた量だけきちんとこなせばよい。自分自身が学生の頃をみても、必要以上に装飾過剰な授業は好きではなかったと言い訳をする。
たぶん、きっと、僕はこの仕事を心から好きでいるわけじゃない。

「先生？」

自分の授業がわかりやすいのかわかりにくいのかも、正直よくわからない。嫌われても好かれてもいないせいか、そういう声が自分に届きにくいのだ。

だから、それを言い訳に、自分のスタイルを崩さないでいる。
だけど、そんな僕にも必要以上に懐いてくる人はいて、それは主に年上に憧れる女子であり、そういう人間を僕はうまくあしらえていない。
よくてせいぜい、少し素っ気無くする程度だ。
上目遣いにこちらを見る子どもは、少女というよりももはや女の雰囲気を漂わせている。

「ああ、ごめん、どこがわからないの？」

せめて先生らしく、と仮面をかぶって、それなれりの対応をする。
職員室には自分以外の職員もいて、みなそれぞれ仕事をしたり、おしゃべりをしたりして過ごしている。放課後の雰囲気はこんなもので、この学校には強烈に学生に好かれている先生がいるわけじゃない。そこそこ好かれ、そこそこ嫌われ、そして大部分には興味の対象外。たぶんそれが一番問題が起こらなくて居心地のいい学校運営だろう。その典型例が自分というだけで。
でも、たぶん、本当の意味で、彼らに興味がないのは、僕だけだろう。
ちぐはぐな文字で書かれたノートに目を落とし、丁寧に彼女の質問に答えていく。
やがて満足そうな顔をした彼女は、舌足らずな礼を口にして帰宅していった。
周囲に気がつかれないように息を吐き、教科書をしまう。

「読みました？」

安堵したのもつかの間、声がかかる。
それは同僚からのものではありえなく、まだ幼さが残る少女特有の不安定な声音だった。

声の持ち主を探す。
記憶が、蘇る。
苦いメールの文章とともに。
一月ほど前に借りた本は、結局そのまま読まずに図書室へ返す羽目となった。
もともと読書などする習慣がない自分がどうかしていたとしか思えない。一冊目の序盤あたりで、もはやそれは睡眠薬と同義となっていた。

「ああ、まあ」

曖昧に答え、あの時挨拶を交わした少女をみやる。
彼女は笑顔を称えている。
その笑顔はどこか不自然で、だけどどうしてそう感じるかもわからない。
担任教師に何かを渡したあとなのか、おおよそ職員室に不似合いな中庸な少女は、軽く頭を下げて帰っていった。
再び、あの時と同じ残り香を置いて。

家路につき、無意識にパソコンの電源を立ち上げる。
最近は携帯でやり取りすることもあるものの、どちらかといえば男同士ではパソコンでメールをやり取りすることが多い。そのせいか、どうしてもルーチンワークのようにメールソフトをひらく癖がある。
今日も、着信を知らせる音がなり、いくつかのメールを確認する。
その中に、あの日の自分を浮つかせた人、からのメールが紛れ込んでいた。
フルネームで登録されたそれも、すでに違う苗字なっている元彼女からのメールだ。
クリックして、中身を読む。
そして、他愛もない内容の中に僕と細くでも繋がっていたい、とい

う意図が見え隠れしていた。
未練がましい気持ちからくる自意識過剰、と思い続けていた自分は、
彼女のずるさに気持ちが軽くへこんだ。
だけど、それでも彼女の手をとりたいと思ってしまう自分がいて、
やけくそになってメールを消去した。
繋いでいた手を離したのはむこうだ。
二度とつながれることのないそれを。

いつもより気分が上下しない自分がそこにいた。
いつのまにか落ちた眠りの中で、確かに誰かと手を繋いでいた。
それが誰かはわからないけれど。

六月・雨の音、二人きり

「ごはん食べてく？といってもあまった弁当だけど」
「ああ、見張ってないと秋音は食べないから」

コンビニのバイトをやっているわたしを、たまに亮太は迎えにきてくれる。
親でも兄弟でもない彼が、わたしのことを一番思ってくれている。
ただの近所の年の違う知り合いだった彼と、こうして二人で過ごすことがあたりまえになったのは、いつだったか忘れるぐらい前のことだ。
放置されていたわたしと、違う意味で放置されていた彼が行動範囲の狭い子供の頃によく出くわすのはあたりまえだ。人の多いスーパー、コンビニ、公園、そういったところを徘徊していた彼とわたしは、いつの間にか一緒に行動していた。
頭がよく、問題行動を起こさない彼と、頭はよくないけれども内向的なわたしは、対外的には大してトラブルを起こさずに、そして徐々にお互い顔の家で遊ぶことで落ち着いていった。わたしが曲がりなりにもまっすぐに育ったのは、彼の愛情があってこそだと思っている。
たった数歳しか違わないのに、父親扱いしたら嫌がるだろうけど。
わたしの家には誰もいない。
正式には両親がいるはずだが、わたしが生まれた歳に無理して買ったはずのこの家には彼らは寄り付きもしない。
きっと今頃それぞれの恋人のところにでもいるのだろう。
わたしはそれを悲観するほど彼らに対して何かの感情を持ち合わせてはいない。

「泊まってく？」

「もちろん」

どちらの家かの違いはあるけれど、ほとんど一緒にすごすというのに、わたしは確認をしない日はいない。
わたしは、わたしで彼に依存している。
役に立たない両親の代わりに。
そして、彼も彼でわたしに依存している。
いなくなってしまった母親の代わりに。
健康的とはいえない関係は、それでもどうにか均衡状態を保ちながら続いている。
亮太かわたしに恋人でもできればまた違うのだろうけど。
そんなことを考えていたら、また、誰かの顔が浮かんだ。
その記憶をかきけすように、わたしは亮太の腕にしがみついた。

元々バイトがない日は図書室に入り浸っている。
大学生である亮太とは帰宅時間が違う。彼は遊んでいそうな外見とは裏腹に、真面目な大学生活を送っているらしい。
あの家には帰りたくない。
だけど、亮太の家に先に上がりこむことはできない。そんなことは気にしない、と言われてはいるけれど、わたしの中のなけなしの線引きのようなものだ。
だからこうやって図書室にいるのだけど、試験勉強をしにくる人間どころか常連組みさえいなかった意味に気がつけばよかったのだ。
大粒の雨が図書室の窓を連打してようやく、わたしは彼らがいない理由に気がついた。
空は真っ黒で、古典的な表現ではあるがバケツをひっくりかえしたような雨が空から降り注いでいる。
持ち合わせの折りたたみ傘で帰宅するのはいささか心もとない。
時計をみれば、閉館時間まであと三十分ほどとなっていた。

その時間で事態が好転するとは思えないけど、とりあえず窓を覗き込むために立っていたわたしは席に座りなおした。
雨音しかしない室内は、かえって静けさが目立っていた。
わたし以外に人がいないのだからなおさらだ。
形式的な図書係ですらとっくに姿を消している。
頬杖をついてぼんやりと空をみる。
もはやどれ程好きな話であろうと本に集中できるような状態ではなくなっている。

「あれ？人いたのか？」

驚きを含んだ声がかかる。
その声に聞き覚えがあって、ぼんやりとした頭を働かせながら振り返る。

「鈴木・・・・・・」

聞き取れないほど小さな声で、その人がわたしの名前を呟いた。
知られていることに驚く。
彼は、古瀬先生は生徒のことなど興味がないと思っていた。まして全くかかわりのないわたしのことなど。

「古瀬先生は押し付けられたんですか？」

鍵束を手にした姿から想像をする。
歳が若い方に入る彼ならば、ここの責任者である教師から面倒くさい仕事を押し付けられそうだと。
予想通りだったらしく、苦笑して頷く。

「外ひどいぞ？」

「そうですねぇ」
「帰れるのか？」
「まあ、なんとか」
短い会話を交わす。
眼鏡の奥には感情のよくわからない瞳が覗いている。
この先生は、いつもそうだ。
「送って行こうか？」
興味がなさそうな顔をした先生に、予想外の提案をされ驚く。
必要以上の接触を自ら図ろうとするタイプには到底見えないのに。
だけど、外の雨の強さをみて、さすがのこの人も知らんふりはできなかったのだろうと思い直す。
「迷惑でなければ」
先生は微かに笑って、こちらを手招きをする。
閉館時間には早いけど、わたしを追い出してここの戸締りを済ませるつもりなのだろう。
大人しくしたがい、わたしは彼の隣に並ぶ。
暗い色の長袖のシャツに、思ったより細い手首と神経質そうな指先がみえる。
亮太とは違う。
しっくりと馴染んだ彼の体を思い出し、いつのまにか比較していた。
「いくぞ」
「ありがとうございます」
外の雨音だけに支配された車内は、ほとんど会話を交わさなかった

にも関わらず、とても居心地が良かった。

七月・会いたくて

目の端に入る女は、毒々しいとしか思えない色の唇を上下させ言葉を紡いでいく。
その姿を見て、やはりこんなところに来るんじゃなかったとため息をつきたい気持ちを押さえる。
せっかくの休みにあてられた友人の披露宴は、楽しい同窓会気分などではなく、ひたすら憂鬱なものだった。
会場の円卓に大人しく座り、与えられた酒をあおる。
全てを知る友人の哀れむような視線が鬱陶しい。

「女子高生かぁ」

唐突に呟かれたそれは、大学の同期が齎したものだ。
昔からそのあたりにやや趣味が傾いていたことを知っていた他のメンバーは、明らかに呆れた顔をしながら若干強引に話を続けていく。
この円卓の場を冷ややかにしていた原因が話し続けるよりもいいのだろう、と判断したのだろう。
話をさえぎられたような格好の彼女は、露骨にキレイに描かれた眉を寄せた。

「で、実際どうよ？もてるっしょ？」
「どうだろう？」
「またまたー、あの年頃って年上に憧れるもんでしょ」

うらやましそうにしている友人には悪いが、やはりそれほどいいものじゃない。
あの年代の子供はとても扱いにくいものだ。自分のような距離感をもってしてもたまにトラブルに出くわすほどなのだから、熱心に関

わりをもっている教師たちならなおのことだろう。
特に恋愛がらみのトラブルなど、巻き込まれることを想像しただけでうんざりする。
そして、やはり職業意識を問われかねないが、そのあたりの問題は見聞きすることが多い。
人と深く関わるのはごめんだ。
ましてそれが己の人生に関わるような面倒くささならばなおさらだ。
女子高生を食ってしまう同職の人間は、実際いなくはない。表面化すればそれは純愛として婚姻関係を結ぶか、左遷されるか。身内に甘い体質ゆえに、職を奪われることはないにしても、それなりにペナルティーが科せられるのは仕方がないことだろう。それが、教職というものだと、したり顔で説教されそうではあるけれど。
自分は少女趣味ではない。
あの年代の不安定で、なおかつ自意識過剰な少女たちに食指をそそられることはない。
まして、自分は望んで教職についた人間ではない。
なんとなく流されて、なんとなく単位をとって、なんとなくそうなった。
切望して、それでも叶えられなかった人間たちにとっては、唾棄されるべき理由ではあろうとも、僕は僕で、生きていく術として今の仕事を必要としている。
だから少女たちにかまけている理由はないのだ。
酒のためにいささか回りくどくなった理由を脳内に繰り出し、またビールを飲み干す。
気の利いた給仕がすかさず空いたグラスに冷えたビールを注ぎ、満足してそれを口に含む。

「恋人はいないの？」

世間からすれば好ましくない話題に盛り上がっていた座卓に、冷や

水をさす質問が投げかけられる。
キレイに塗られた化粧の彼女は、余裕の表情で自分を見下していた。
いくら鈍感だとはいえ、振った女の不遜な態度に気がつかない男たちではない。だけど、他人が答えにくい質問をさらりと口にする彼女の前に、周囲は口を出しにくい雰囲気に陥っている。
私は私にふさわしい人と結婚がしたいの。
ただそれだけの言葉を残し、去っていった元恋人に、精一杯の笑みを浮かべる。

「よりどりみどりといえばそうなんだけどなぁ」
「あ、やっぱり女子高生？」

おどけた答えに、先ほど食いついてきた同期が混ぜ返す。

「肌とかぴちぴちでしょー」

周囲にいる女性に悪気がなく彼は好奇心を満たそうと質問を重ねる。
そのたびに、元恋人はきれいに塗られたその化粧がひび割れそうなほどの表情を作り出す。
この程度の戯言で気分を害するのならば、あんなことをしなければいい。
抱いていた未練は吹き飛び、執着していた心がどこかへしぼんでいく。
キレイだと思っていた顔も、仕草も、体系も、何もかもがうそ臭くて、人目で高級品だとわかる衣装すら彼女には不釣合いに見えてしまった。

やや荒れた席も、新郎新婦の幸せそう笑顔が照らし、そして緊張を孕んだ時間は終了する。
二次会に出席するつもりもない自分は、そうそうに引き出物だけを

手に、帰り支度をする。
いつのまにか距離を縮めてきた彼女に、できるだけ感情の篭らない表情を作る。

「二人で抜け出さない？」

まるで断られることを想定していない口ぶりに、自分は彼女のどこを愛していたのかがわからなくなる。
かわいい、とも、愛らしいとも思ってきた彼女の何を自分は理解していたのかと。

「悪いけど、明日も仕事だから」
「でも」

甘えたような仕草で、右腕に隙なく塗られた爪をもつ右手を添える。
それをさりげなく振り払う。

「化粧なんざしなくてもかわいいかわいい女子高生が待ってるから」

思ってもいない嫌味を口にして、彼女を牽制する。
あの連中に邪な思いを抱いたことは一度とてない。あくまで自分は職業としての教師であり、彼ら彼女らはただの客でしかありえない。
だけど不意に浮かんだ、誰かの笑顔に、自分の中で戸惑いを大きくしていく。
二の句を継げない元彼女を尻目に、自分はようやく歩き出した。
一喜一憂することがなくなるであろう自分を想像して、ようやく気分が晴れた。

「鈴木、化粧してるのか？」

分厚い本を開き読む体制に入ろうとしていた鈴木に、思わず声をかける。

その声は思いのほか大きくて、図書室を根城にしている連中から一斉に視線が向けられる。

ほとんどのそれらは、瞬時にして興味をなくし、自分たちの世界へと帰っていく。

ただ、鈴木に関しては、胡乱げに自分を見上げている。

「まあ、それなりに」

常から落ち着いた声音を、さらにボリュームを下げて返事をよこす。

彼女が、声を荒げたところや、歳相応にはしゃいでいるところを見たことがない。もっとも、それほど彼女の事を知っているというわけではないのだけど。

最近の流行なのか、黒々と塗られた睫毛を伏せ、彼女もまた本の世界に集中していく。

随分と大人びた顔を見せる横顔を尻目に、読む予定のない本を借りる手続きをとる。

珍しく仕事をしている図書係とやりとりをする間、不自然にならないように鈴木の様子を探る。

どうして、ただの一生徒のことが気になるのかがわからない。

彼女とは、ここで初めて会って、挨拶を交わし、偶然大雨の日に送っていったことがある程度だ。

校内で、積極的に会話を交わす関係性ではない。

それならば、甘ったるい話し方をしてわからないことを聞いてくる他の子の方が、よほど親しいともいえる。

なのに、時折こうやってここの場にきたくなるのはどういうわけな

のか。
手続きが終わり、たった一冊の本を抱え、職場へと戻っていく。
まだ残された仕事の量を思い出し、うんざりする現実へと。
会いたい。
ただそんな言葉が浮かび、それを頭の隅へと追い払いながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8163x/

---

adagio

2011年10月28日15時12分発行